

鶏の閉鎖群育種による後代調査

(V) ロードP系統について

名倉清一 斎藤季彦

宮下光男

1、はじめに

当场種鶏は昭和38年まで白レグA、B、C、Dの4系統、ロードK、Pの2系統、横班ロック、ニューハンプシャー、ホワイトロック種各1系統をもち、白レグは相反反覆選抜育種にもとづいて改良育種を進めてきたが外国鶏の進出に対処するため昭和38年国において全国都道府県養鶏関係施設の種鶏（白レグ）から優良家系を抽出し、国および地方を通じての国内鶏の総合育種計画がたてられた。

当场白レグd系統33T-7家系も卵数系の優良家系として選定されたので、昭和39年度より種鶏の品種および系統の整理を行ない、d系統（33T-7家系）の増飼を計るとともに、昭和40年度米国Brender農場より白レグの卵重系統を輸入し、Br系統として育種を始めた。兼用種はロードP系統のみとし、昭和38年度より閉鎖群として増飼を計り改良を進めている。

当场基礎系統は上記3系統に整理し、それぞれの系統の特徴を明確にしその性能の向上を図りつゝ実用鶏造成のための組合せ検定に供用している。

この3系統の育種成績は昭和41年度白レグd系統、昭和42年度ロードP系統、昭和43年度白レグB系統、昭和44年度d系統（42年度～44年度）について報告したので本年度はロードP系統のその後の育種成績について報告する。

2、ロードP系統の育種経過

昭和28年農林省が米国より輸入した、P armenter系を旧大宮種畜牧場から昭和30年に譲り受け飼養しはじめた。

昭和35年よりP28-7、P28-18およびP28-35の血縁のものを集めた、34T-122雄鶏を基とし、昭和35年から昭和37年の3ヶ年系統繁殖を行ない昭和38年から強度の近交をかけた閉鎖群育種を行つてきた、その種雄鶏の採取図および総合成績は第1図のとおりである。

第 1 図

ロード p 系 34T-122
およびその後代調査

系		統 繁 殖		強	
昭和35年 繁殖に使用した雄		昭和36年 繁殖に使用した雄		昭和37年 繁殖に使用した雄	
昭和38年 繁殖に使用した雄					
				37T-183	
34T-122		35T-127		36T-155	
				36T-156	
				37T-175	
				37T-176	
				37T-178	
				37T-179	
				37T-184	
				37T-188	
後 代 調 査 成 績	短 期 成 績	調査開始羽数および終了率		48羽	
		産 卵 率		118羽 99.2%	
		初 産 日 令		201 188	
		10ヶ月令卵重		58.3(年平均) 56.3	
		10ヶ月令体重		2.247 2.458	
後 代 調 査 成 績	周 年 成 績	羽数および終了率		48羽 75%	
		産 卵 個 数		238 250	
備		考			

の後代種雄鶏の採取図

総合成績

度の近交をさけた閉鎖群育種			
昭和39年 繁殖に使用した雄	昭和40年 繁殖に使用した雄	昭和41年 繁殖に使用した雄	昭和42年 繁殖に使用した雄
38T-163 38T-166 38T-169 38T-177	38T-163 39T-168 39T-176 39T-177 39T-179 39T-180 39T-181 39T-183 39T-184 39T-188 39T-189 38T-185	40T-165 40T-166 40T-167 40T-152 40T-154 40T-155 40T-160	41T-509 41T-511 41T-517 41T-524 41T-525 41T-526 41T-503 41T-508
183羽 99.5% 7.69 198 58.9 2.630	134羽 99.3% 80.0 168 59.9 2585	137羽 100.0% 75.0 185 58.7 2.426	191羽 97.1% 77.9 190 57.4 2.745
82羽 98.8% 264	105羽 95.2% 276	97羽 95.9% 261	64羽 93.8% 254
	収容鶏舎の都合で初産 当時日照時間と合せて 14間点灯	台風26号(9月)に よる被害により若干産 卵成績に影響あり	

第2図

ロードp系昭和43年
および後代調査

昭和35年から昭和42年までの現在の種鶏に關係する種雄鶏の採取図			昭和43年繁殖に使用した雄	
			42T-312 ← 42T-314 42T-321 42T-302 42T-306 42T-307 42T-308 42T-317 42T-320 2ヶ年使用 41T-503	
後代調査成績	短期成績	調査開始羽数 終了率 産卵率 初産日令 10ヶ月令卵重 10ヶ月令体重	176羽	92.6% 72.5% 194日 554g 252.8g
	周年成績	羽数および終了率 産卵個数(終了鶏)	128羽	94.5% 256個

からの種雄採取図
綜 合 成 績

昭和 4 4 年 繁殖に使用した雄	昭和 4 5 年 繁殖に使用した雄	昭和 4 6 年 繁殖に使用予定の雄
2ヶ年使用 4 2 T - 3 1 2 4 3 T - 2 2 0 4 3 T - 2 2 4 3 4 T - 2 2 6 4 2 T - 3 0 8 4 3 T - 2 1 3 4 3 T - 2 1 4 2ヶ年使用 4 2 T - 3 1 7 4 3 T - 2 0 2 4 3 T - 2 0 4 4 3 T - 2 0 9	4 4 T - 2 2 1 4 4 T - 2 2 2 4 4 T - 2 2 3 4 4 T - 2 2 4 4 4 T - 2 2 6 4 4 T - 2 0 1 4 4 T - 2 1 5 4 4 T - 2 1 6 4 4 T - 2 0 5 4 4 T - 2 0 6 4 4 T - 2 0 7 4 4 T - 2 1 1 4 4 T - 2 1 3	2ヶ年使用 4 4 T - 2 2 1 4 5 T - 2 3 0 4 5 T - 2 3 1 4 5 T - 2 2 2 2ヶ年使用 4 4 T - 2 0 1 4 5 T - 2 2 4 4 5 T - 2 3 4 4 5 T - 2 3 7 2ヶ年使用 4 4 T - 2 0 7 4 5 T - 2 3 2 4 5 T - 2 2 6 4 5 T - 2 2 7 4 5 T - 2 2 8 4 5 T - 2 2 1
2 3 9 羽 9 4 6 % 8 3 3 % 1 9 1 日 5 5 4 ♀ 2 3 6 6 ♀	2 2 4 羽 9 2 4 % 7 0 7 % 2 0 2 日 5 5 4 ♀ 2 6 2 8 ♀	
1 5 3 羽 9 4 1 % 2 5 7 個		

3、昭和43年以後の成績概要

(1) 昭和43年の繁殖成績

昭和43年の繁殖に供用した種雄は、第2図に示すとおり、昭和42年に供用した41 T-509から2羽、41 T-511から1羽、41 T-517から4羽、41 T-503から2羽と11 T-503の計10羽を用い、昭和43年鶏雌77羽に交配した。交配にあたっては出来るだけ近親交配をさけるよう配慮したため1雄に5羽～9羽を配した、その後代の成績は第1表の13年鶏の欄に示すとおりで、短期検定開始羽数176羽、初産から100日間の短期検定終了羽数は163羽でその終了率は92.6%であつた、産卵率は平均72.5%、初産日令194日、10ヶ月令体重2528g、10ヶ月令時より10ヶの平均卵重55.4gで、家系間の差は採取羽数が同一でないで直ちに比較することは危険であるが終了率で75%から100%の間にあり、産卵率は50.5%から84.7%、初産日令183.3日から202.3日、10ヶ月令体重2200gから2787g、10ヶ月令卵重53.6gから58.1gの間であつた。

周年検定は短期検定終了鶏163羽中128羽を選抜して引続き265日間調査を行い初産より365日間実施した、選抜した128羽中斃死したもの7羽でその終了率は94.5%で終了鶏の平均産卵個数は255.7個であつた。

この平均成績を昭和42年鶏と比較すると短期検定終了率は1.5%、産卵率は5.1%、初産日令4日、卵重2.0g劣り、体重は217g小さくなつた、周年成績は終了率で0.7%、終了鶏平均産卵個数2個向上した。

昭和43年鶏は昭和42年鶏と比較して初産当時産卵が若干悪かつたので短期成績は劣つたが、短期検定終了後、周年検定を実施したものは昭和42年鶏は64羽で短期検定終了鶏の約34%、昭和43年鶏は約73%を選抜実施した、その選抜は昭和43年鶏は昭和42年鶏の約倍以上選抜圧をゆるめたので上記の周年成績からみて昭和43年鶏と昭和42年鶏は大差がないものと推察される。

(2) 昭和44年の繁殖成績

昭和44年の繁殖に供用した種雄は、第2図に示すとおり、昭和43年に供用した42 T-312から2羽、42 T-321から1羽、42 T-308から2羽、42 T-320から2羽、41 T-503から1羽と42 T-312、42 T-308、42 T-317は前年に引続いて供用し計11羽を用いた、これに交配した雌は42年鶏雌50羽、41年鶏雌25羽計75羽を出来るだけ近親交配をさけるよう配慮して交配した、75羽中子雌を採取したものは60羽である。その後代の成績は第1表14年鶏の欄に示すとおりである。

短期検定開始羽数239羽短期検定終了羽数226羽で終了率は94.6%で産卵率は83.3%、初産日令190.6日、10ヶ月令体重

2366♂、10ヶ月令もより10個の平均卵重55.4gであつた、短期検定終了鶏226羽中より約70%の156羽を選抜して引続き265日間調査し初産から365日間の周年検定を行つた、周年検定の成績は開始羽数156羽、終了羽数141羽で終了率92.3%、終了鶏平均産卵個数は257、1個であつた。この総合成績を家系別にみると短期成績では終了率は88.9%から100%の間にあり産卵率は73.1%から89.5%、初産日令176.8から202日、体重は2215gから2538g、10ヶ月令卵重は52.4gから58.0gの間にあり周年成績では終了率77.8%から100%終了鶏平均産卵数は205.9個から275、1個の間にあつた。

これを43年鶏と比較すると短期検定終了率2.0%、産卵率10.8%、初産日令3.4日、10ヶ月令体重162g、周年検定終了鶏平均産卵個数1.7個優れており、周年検定終了率が2.2%劣り、10ヶ月令卵重は43年鶏と同程度であつた、短期検定産卵率を43年鶏と比較すると10.8%と大巾に優れているが、これは43年鶏の初産当時の産卵の不調と、44年鶏の初産当時順調に経過したことによる差異でその主たる原因は43年と44年の秋の天候と、餌付時期、育成に關係することが大きいものと思われる、周年検定実施鶏は短期検定終了鶏より43年鶏は約73%、44年鶏は約70%と殆んど

同じ率で選抜しており、終了鶏の平均産卵個数は43年鶏255.7個に対し44年鶏257.4個でその差は1.7個である。家系別の差異についてみると44年鶏の方がすぐれているが、44年鶏の短期検定産卵率の大巾な向上は44年秋期の環境に支配された影響が大きく、系統性能の向上にすべて由来するものとは思われず、総合的に各項目を検討すると44年鶏は43年鶏より性能的に若干向上したものと推察される。

(3) 昭和45年の繁殖成績

昭和45年の繁殖に供用した種雄は、昭和44年鶏の短期成績が全体的によく、家系別差異があまりなかつたので45年繁殖に供用する雄の採取は、44年繁殖に供した雄の殆んどから採取し供用した、その採取は第2図に示すとおりで43T-220から3羽、43T-224から2羽、42T-308から1羽、43T-214から2羽、42T-317から2羽、43T-202、43T-204、43T-209からそれぞれ1羽の計13羽を採取供用した。

交配に供した雌は43年鶏30羽、44年鶏の若雌7羽計100羽で子雌が採取出来たものは86羽であつた。

その後代の短期成績は第1表45年鶏の欄に示すとおりで、周年検定は実施中である、短期検定開始羽数は224羽終了羽数は207羽で終了率92.4%、産卵率は70.7%で冬季休産したものが多く出たので(原因

は市販飼料の凝あり)産卵強度(第1表註参照)でみると79.6%となつた、初産日令は201.8日、10ヶ月令体重は2628g、10ヶ月令卵重は55.4gであつた、本年は14年鶏の短期検定終了直後の若雌から15年鶏を採取した子雌は36%で、各家系の採取羽数の巾が大きいので家系別の比較は行わないが、総合成績で15年鶏を13年鶏および14年鶏と比較すると短期検定終了率は14年より2.2%劣り、13年鶏とは同程度であり、産卵率は14年鶏より12.6%、13年鶏よりは1.8%劣つたが、産卵強度は14年鶏より4.1%劣るにとゞまり、13年鶏よりは7.1%まさつた、産卵日令は13年鶏より7.8日、14年鶏より11.2日延び、10ヶ月令体重も13年鶏より100g、14年鶏より262g増加し10ヶ月令卵重は13年14年鶏と同程度の55.4gであつた。

以上のように14年鶏よりは卵重、13年鶏よりは卵重および産卵強度以外の各項目について劣るような結果であるが、産卵性については産卵開始後の給与飼料の内容に凝はしい点があつたので産卵強度についてみると、13年鶏より7.1%まさり14年鶏より1.1%劣る成績で産卵率が示すような大巾な低下はみられず産卵性能が特に低下したとは思われない、しかし初産日令の延長、10ヶ月令体重の増加は今後充分検討すべきことであり、初年鶏雌からの採取についてもなを慎重に行うべき点があると思われるので現在実施中の周年検定の成績とも併せ充分検討いたしたい。

第1表 昭和43年鶺鴒からの後代成績

年度別	父番号	母羽数	短期			成績			(初産より100日間)				周年			成績		次代の雄の採取		
			開始羽数	終了羽数	終了率	産卵率	産卵強度	初産日令	10ヶ月体重	10ヶ月卵重	開始羽数	終了羽数	終了率	産卵個数						
13年	12T-202	6羽	23	19	82.6	69.4	6.94	195.9	278.7	56.6	14		100	262.8	鶺鴒	中	施	実	採	
	12T-306	2	4	3	75.0	77.3	7.73	202.0	250.0	55.7	3		100	220.3						
	12T-307	5	25	23	92.0	76.2	7.62	194.3	273.9	56.6	21		85.7	260.4						
	12T-308	3	8	6	75.0	84.7	8.47	183.3	255.8	57.0	5		80.0	284.5						
	12T-312	3	6	6	100	76.0	7.60	185.2	220.0	54.2	4		100	266.5						
14年	11T-503	3	8	8	100	80.5	50.5	191.8	250.0	53.6	3		100	256.0	鶺鴒					
	12T-311	5	20	19	95.0	66.3	6.63	202.3	249.5	53.9	11		81.8	235.1						
	12T-321	8	51	50	98.8	80.1	80.1	187.4	246.1	54.7	44		100	271.7						
	12T-320	6	18	18	100	68.7	68.7	187.9	243.1	55.1	16		87.5	230.1						
	12T-317	4	13	11	84.6	58.3	58.3	192.4	256.8	58.1	10		80.0	206.1						
計及平均	10羽	45羽	176	163	92.6	72.5	72.5	194.0	252.8	55.4	128		94.5	255.7	鶺鴒					
14年	13T-202	5	13	13	100	93.7	85.7	179.0	238.8	52.4	9		77.8	250.3						鶺鴒
	13T-204	5	23	21	91.3	88.3	88.3	176.8	244.1	53.6	19	18	94.7	271.3						
	13T-209	6	17	17	100	80.1	80.9	183.1	240.3	54.1	9	9	100.0	250.3						
	13T-213	5	22	21	95.5	85.2	88.1	183.9	231.4	53.2	15	13	86.7	263.0						
	13T-214	6	24	24	100	89.5	89.5	195.2	221.5	57.1	16	15	93.8	205.9						
15年	13T-220	2	7	7	100	73.1	73.1	191.7	244.3	57.2	2	2	100	275.1	鶺鴒					
	13T-221	6	23	22	95.7	86.8	86.8	184.9	238.6	57.2	17	17	100	267.6						
	13T-226	9	16	16	100	87.2	87.2	199.6	242.4	58.0	35	33	94.3	266.1						
	12T-308	5	18	18	100	75.6	75.6	192.9	232.2	53.6	9	7	77.8	253.3						
	12T-312	5	27	24	88.9	74.0	74.3	202.0	223.5	53.0	15	14	93.3	240.4						
計及平均	11羽	60羽	239	226	94.6	83.3	83.7	190.6	236.6	55.4	156	144	92.3	257.1	鶺鴒					
15年	14T-201	2	4	4	100	83.3	83.3	213.0	245.0	56.2										鶺鴒
	14T-205	4	10	10	100	75.1	78.7	198.2	273.5	58.5										
	14T-206	3	15	14	93.3	67.1	76.1	206.3	287.5	55.4										
	14T-207	5	19	14	73.7	65.6	81.0	192.4	284.7	56.1										
	14T-211	2	6	6	100	78.8	84.2	192.7	260.8	56.2										
16年	14T-213	1	2	2	100	81.5	81.5	188.0	247.5	58.6					鶺鴒					
	14T-216	1	7	6	85.7	69.2	75.0	201.1	266.7	61.4										
	14T-226	1	1	1	100	87.0	87.0	197.0	265.0	58.8										
	14T-221	4	16	16	100	60.9	76.7	205.3	264.7	56.4										
	14T-222	5	29	26	89.7	68.5	80.0	206.4	268.3	56.9										
17年	14T-215	6	13	12	92.3	79.2	84.6	198.8	258.1	57.1					鶺鴒					
	14T-223	5	32	30	93.8	63.1	74.5	204.9	241.9	53.2										
	14T-224	7	40	36	90.0	71.9	79.7	208.5	266.8	56.2										
	14T-221	7	40	36	90.0	71.9	79.7	208.5	266.8	56.2										
	13羽	86羽	224	207	92.4	70.7	79.6	201.8	222.8	55.4										
計及平均	13羽	86羽	224	207	92.4	70.7	79.6	201.8	222.8	55.4					鶺鴒					

註、重卵強度は、短期検定調査期間中、7日以上連続休産（いわゆる冬季休産）した日数を調査日数から除いて産卵個数を調査日数で除いたものを言ふ。

4、ロード、P系統を供用して実用鶏造成のための組合せ検定の結果（43～45年）

国産実用鶏造成のために優良家系の組合せ試験を実施しており、当P系統を供用した成績を抽出すれば第2表のとおりである。

この組合せ試験は国の計画した東日本地区のものと都単のもの、および農業改良普及所の協力を得て民間の採卵養鶏場に委託し、当場の試験方法と同じように実施したものである。民間に委託した試験場所Aは西多摩郡、清水養鶏場、Bは北多摩郡、乙幡養鶏場、Cは町田市、白井養鶏場、Dは八王子市、坂本養鶏場である。

当P系統は昭和12年までは主として2元交配の相性について調べたその結果は当场白レグBおよびd系を雄に用い、ロードP系を雌にした交配と、ロードP系を雄にして白レグB系を雌とした組合せが相性がよく昭和41年、昭和42年に国において優良組合として抽出された。

昭和43年度以降の2元交配は43年度ロードP×白レグd、ロックD×ロードPの白レグ、ロードの逆交配と、兼用種間の組合せについて実施し、45年度白レグd×ロードPの組合せは昭和42年度実施し優良組合として抽出されたが、両系統ともその後改良を進めているので再確認の意味で実施した、ロードP×白レグdの交配はあまりよい相性を示さず、ロックD×ロードPの交配は兼用種同志であるので体重と飼料要求率に問題は

あるが将来、白レグとの3元、4元交配に供用することは出来るような結果を得た、白レグd×ロードPの交配は今回は育成率に問題点はあつたがその他の項目はすぐれ42年度に優良組合せとして抽出されたように今回も比較的すぐれた成績を得た。

3元交配は43年度組合せ、44年度1組合せ、45年度1組合せの計5組合せ行つた結果、43年度の福島j×（埼玉K×東京P）が最もすぐれ、次に東京B×（東京P×東京d）、45年度の東京B×（東京^{ホク}D×東京P）の順であつた。

4元交配については、43年度2組合せ、44年度2組合せ、45年度1組合せの計5組合せについて実施した、この1元組合せについては1部民間養鶏場にも委託してその適地性も調べた、配付先によつて若干のちがいはあるが（栃木A×東京B）×（東京B×東京P）が最も良く、次で（埼玉K×東京B）×（東京d×東京P）の組合せである。

特に3元交配の福島j×（埼玉K×東京P）と4元の（栃木A×東京B）×（東京B×東京P）の2組合せは体重に問題点はあるがその産卵パターンなどからみて鶏舎構造が不完全で冬季の寒さの厳しい環境の農家養鶏向の実用候補組合せとして今後実用化試験を行い検討するに値する組合せと思はれる。

年 度	交 配 様 式 ♂×♀	組 合 せ 試 験 より P 系 統 を 供 用 し た 組 合 せ を 抽 出 し た 成 績	試 験 場 所	成 育 率 %	成 存 率 %	50%産卵 日 令	産 ベ ン デ イ %	10ヶ月令		要 求 率	1日羽 生産量	検 定 期 間
								卵 重	体 重			
								個	個			
43	東京P×東京d	当場	98.0	98.0	161	66.5	229.4	588	254.6	29.96	31.4	500日 令
	東京B×東京P	"	91.3	848	156	70.6	223.8	563	288.5	30.70	37.7	
	東京B×(東京P×東京d)	"	100.0	940	174	71.7	239.9	567	222.2	27.10	40.0	
	東京d×(東京P×東京B)	"	100.0	900	175	64.6	217.2	593	229.8	28.52	37.3	
	福島j×(埼玉K×東京P)	"	96.0	896	168	72.4	235.1	602	227.9	28.92	42.0	
	(埼玉K×東京B)×(東京d×東京P)	A	93.0	750	164	70.2	236.8	63.5	—	28.18	41.3	
44	東京B×(東京d×東京P)	B	74.5	686	158	66.7	191.2	54.5	—	30.04	35.7	450日 令
	東京B×(東京d×東京P)	C	100.0	806	163	70.5	227.3	56.8	—	28.79	39.8	
	東京B×(東京d×東京P)	A	85.4	610	165	66.6	210.9	64.1	—	28.49	39.0	
	福岡N×(東京P×東京B)	当場	93.5	884	171	61.3	172.0	57.0	219.0	33.44	34.6	
	(東京P×東京d)×(栃木A×東京B)	"	90.0	100.0	157	68.2	204.6	59.3	215.0	28.88	38.4	
	(栃木A×東京B)×(東京B×東京P)	"	94.0	894	168	66.2	187.8	58.1	217.0	28.19	37.5	
45	東京d×東京P	A	67.2	838	166	70.0	194.5	62.1	—	—	40.6	450日 令
	東京B×(東京P×東京d)	B	63.8	875	172	65.6	189.5	61.9	—	29.50	39.1	
	(福岡N×東京B)×(東京P×東京d)	C	96.0	81.3	171	66.6	183.6	60.0	—	28.25	39.5	
	東京d×東京P	D	90.0	800	166	71.3	191.5	58.8	—	28.46	40.7	
	東京B×(東京P×東京d)	当場	71.4	833	155	75.3	202.8	58.6	254.8	28.51	42.5	
	(福岡N×東京B)×(東京P×東京d)	"	95.2	852	150	73.0	194.2	56.3	225.3	27.65	39.5	
		"	95.2	850	171	60.7	161.2	58.9	236.7	31.68	35.2	

註、①45年度は上記の他に民間委託試験3組合せがあるが、小化月日の関係で現在実施中で成績とり

まとは出来ないので次回に報告する、

②A、B、C、Dは民間委託場所を示す、

5、おわりに

当场ロードP系統は国で輸入したP a r m e n t e r系を旧大宮種畜牧場より導入し昭和35年から昭和37年まで系統繁殖を行ない、昭和38年から閉鎖群として育種を進めてきた、昭和42年までの経過および成績は第1図に示すとおりでその後の昭和43年から昭和45年までの経過および成績は第2図および第1表に示すとおりで、体重および初産日令に若干の問題点はあるが産卵性、強健性などの点から現段階では充分実用鶏造成試験の基礎系統として供用し得るものと思われる。

当ロードP系統を供用して実用鶏造成のための試験は昭和42年までは主として2元交配について実施し、当场白レグBおよびdとの相性がすぐれ、 $B \times P$ 、 $d \times P$ 、 $P \times B$ 、の組合せは国において優良組合せとして抽出された、

昭和43年から昭和45年にかけては、3元4元を主体に実施した、体重に若干の問題点はあるが、3元交配の福島j $\times$ (埼玉K $\times$ 東京P)と、4元交配の(栃木A $\times$ 東京B) $\times$ (東京B $\times$ 東京P)の組合せは農家養鶏向としての実用候補組合せとして検討にあたいするものと思はれる。

当P系統は生存率、産卵性はすぐれているが、体重、初産日令など今後改善すべき要素も充分にある、しかし閉鎖群としての群の大きさは200羽程度しか飼養出来ないのが今後問題点の改善に困難が予想されるが特性を失はないよう欠点を除々に改善しながら維持していく所存である、大方の御批判と御指導を願する。